

2. 歴史

島内の各遺跡からは、50万年前の旧石器時代の石器が発掘されており、このころから既に人が住んでいたことが確認されている。

島には平家落人の話が伝えられており、「1187年（文治3年）、壇ノ浦の合戦で敗れた平清盛の弟、家盛が島に身を寄せ土着し、宇久氏の始祖となった。」というものである。こうして宇久（平）家盛は、宇久島を本拠地とする在地土豪となり、島に館を築き、ここから壱岐・対馬のようにまだ1国を形成していなかった五島列島全体の政務を司るようになった。宇久氏の治世は7代、約200年にわたったが、1383年（永徳3年）8代宇久^{さとる}覚の時代に、高麗（朝鮮）との対外貿易を積極的に展開すべく、宇久島を引き揚げ五島列島のなかで最も大きく、平坦な耕地があり宇久氏に対抗する大きな勢力がない福江島（現在の五島市）に移住し五島家の祖となった。



平家盛公上陸地（船隠し）



平家盛公上陸記念碑

江戸時代に入ると宇久島の統治は2分割され、現在の平^{たいら}地区を中心とした地域は福江藩、神^{こうのうら}浦地区を中心とする地域は富江藩が統治した。このことが現在まで言葉や文化などさまざまな面において影響を及ぼしている。

明治以降は、1889年（明治22年）の町村制施行により北松浦郡平村と神浦村となり、1949年（昭和24年）には平村が町制施行し平町に、1955年（昭和30年）に平町と神浦村が合併し、宇久町となった。そして、平成の大合併により、2006年（平成18年）に佐世保市と合併「佐世保市宇久町」となり、現在に至っている。

3. 産業

産業構造を就業者数からみると、サービス業に代表される第3次産業の割合が58%と最も高く、肉用牛の放牧と漁業に代表される第1次産業の割合も29%を占める。一方、他の離島と同様に依存度の高かった公共事業の減少に伴い建設業の減少が著しく、第2次産業の就業者数は全体の

13%となっている（図表1）。

島内にある主要な事業所としては、農水産物の加工・販売を行っている(株)宇久食品、バス路線を維持している(有)宇久交通、道路の整備や清掃を行っている(株)宇久開発がある程度であり、いずれも第三セクターである。

4. 人口

ピーク時11千人以上だった人口は2005年現在、3千人台にまで激減している（グラフ1参照）。

5. 来島者数（観光客数）

1990年に、「平家の里づくり事業」として始まったのが島の平家伝説の特徴を活かした「平家まつり」であり、現在も宇久島のメインイベントとなっている。また、スポーツ合宿の誘致のため、美しい海に囲まれた離島の豊かな自然を活用し、2000年に野球場、またその関連宿泊施設として「宇久シーパークホテル」をオープン。翌2001



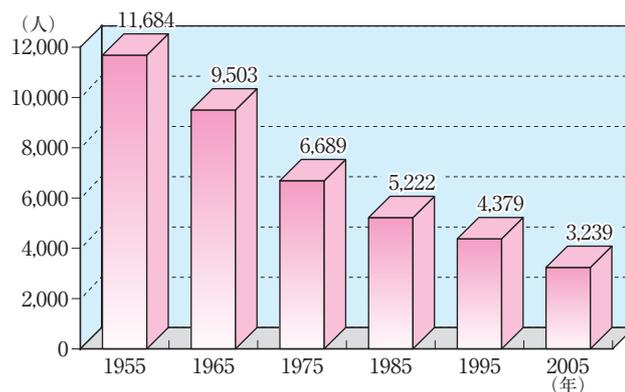
平家まつり

図表1 島内の産業分類別就業者数の推移 (人)

産 業	1990年	1995年	2000年	2005年	構成比
就業者総数	1,974	1,805	1,564	1,245	100%
第1次産業	742	605	357	366	29%
農林業	455	376	226	263	21%
水産業	287	229	131	103	8%
第2次産業	436	383	396	158	13%
鉱業	0	0	1	1	1%
建設業	273	248	322	111	9%
製造業	163	135	73	46	3%
第3次産業	796	817	811	721	58%
電気・ガス・水道	5	6	9	6	1%
運輸・通信	147	140	110	92	7%
卸・小売業	212	236	187	167	13%
金融・不動産業	14	14	10	10	1%
サービス業	328	333	398	367	30%
公務	90	88	97	79	6%

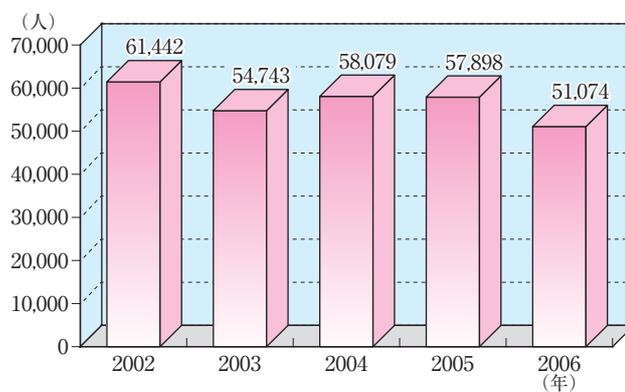
資料：国勢調査

グラフ1 宇久町の人口推移



資料：国勢調査より当研究所で作成

グラフ2 宇久町の観光客数推移



資料：県観光統計より当研究所で作成

年には第3種公認レベルの陸上競技場を整備し、宇久総合公園が完成した。続いて2004年、クルージングスポットとして最大38隻のヨット類が収容可能な「フィッシャリーナ宇久」が整備され、同年より「宇久ヨットレース」が開催されている。また、ここは翌2005年に九州海の駅設置推進会議より「ごとう・うくじま海の駅」として海の駅にも認定された。

このような振興策もあり、宇久島には年間約5万人が訪れている（グラフ2参照）。

Ⅱ. 宇久島活性化の取組み

公共事業に依存していた宇久島では建設業者が減り、第三セクターの各事業や佐世保市の行政センター（旧宇久町役場）が島内最大の職場となっており、行政依存の島へと変貌した。その上、人口も減少し続け高齢化率も40%を超えており（長崎県平均は23.6%、05年国勢調査）、過疎化が進行している。

現在、この過疎の島「宇久島」を活性化させるために民間や行政によるさまざまな取組みが行われている。

1. ぎばろう会

まちおこしグループ「ぎばろう会」の結成は1990年、島で「平家の里づくり事業」に取り組んだ際、地元の歯科技工士である本村竹仁氏が中心となり、島民有志13名にて家盛和太鼓の演奏を行ったことが発端である。翌1991年には、島に新しい風を起こそうという意味からまちおこしグループ「グループ風」を結成、子どもや商工会婦人部などへ和太鼓の指導を積極的に行ってきた。続いて『島活性化のためには何でもやる』をスローガンに2007年、「グループ風」を発展させた新たなまちおこしグループ「ぎばろう（頑張ろう）会」を有志16人で結成した。「ぎばろう会」では、参加者各人が持つ得意分野（本村氏は和太鼓指導、島の歴史に詳しい人はボランティアガイド等）を活かした島おこしを模索しており、さまざまな取組みを独自に展開している。

（1）活動内容

①観光ボランティアガイドの養成

島内には現在5人の観光ガイドがいるが、さらに観光客に宇久島の魅力を発信することを目的として、2007年9月より（財）日本離島センターの後援を受け、宇久町観光ボランティアガイド養成講座を開催した。この講座には島内から約20人の受講生が集まり、今後は、彼らをモニターツアーなどに同行させてプロ意識を磨くことで、一人前の宇久島観光ボランティアガイドとして育てていくことにしている。

②テントハウスの製作

組み立て式のバンガロー（テントハウス）を自主製作。1日あれば十分組み立てることができ、持ち運んで様々な場所に設置可能なことから、島内各所でのイベントなどに活用されている。

③島民や観光客向けに各種「観察会」を開催

島民には自分の住んでいる島をもっと好きになってもらうためにホテルや星空の観察会を、また、観光客には島の豊かな自然を体感してもらうためにウミガメの観察会を開催し、宇久島の良さを再認識させている。



千匹以上が舞う宇久島のホテル

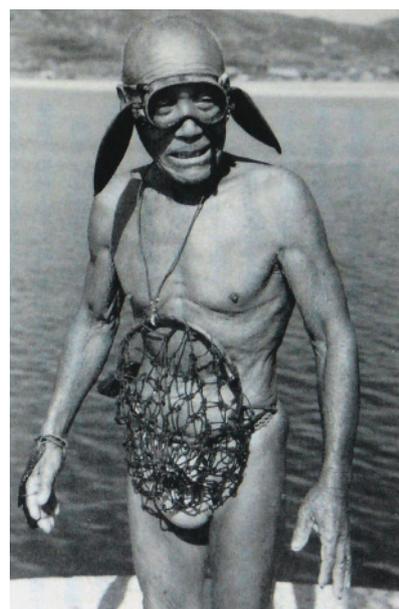
④島民を他の離島へ案内

自分達の島の良さに気付いていない島民がまだ多いことから、他の島をみて宇久島を再確認しようと参加者を募り、同じ五島列島の福江島へツアーを行った。通常、宇久島民が島外へ出るということは、福岡か佐世保へ行くことを意味しており、他の島を訪れるという機会はない。今回のツアーで初めて福江島を訪れた参加者は、同じ“島”でも自分達の島とはまるで異なる空気を肌で感じ取り、宇久島の良さを再確認することができた。また、参加者のなかからはこのような活動に賛同し「ぎばろう会」へ入会する者も現れた。

2. 島おこしに立ち上がる地元住民（「海士（あまんし）」の子孫）

（1）海士（あまんし）とは？

「海士（あまんし）」とは、鮑漁を行う海士（男性）のことである。他地域の『海士』は“あま”と読み、その漁は鮑だけに留まらない。しかし、ここ宇久島では『海士』をその独特の格好・風貌（腹に採取した鮑を入れるカゴをつけ、両端に猫の皮でできた空気調整袋を装備した金属製の水中眼鏡をかけている）と漁法（鮑を取る道具を腰に下げ潜水、鮑を見つけるとその道具を刀のように腰から抜いて採取する）から“あまんし”、つまり海の武士と呼ばれ、鮑漁のみで生計を立てている漁師のことを意味している。彼ら海士たちは島内で際立った存在であった。

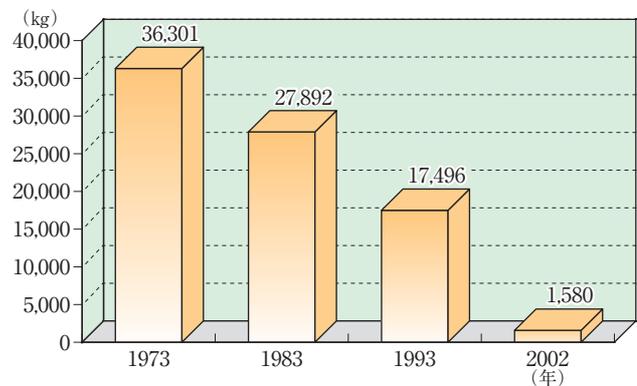


あまんし
海士の独特なスタイル
はまがた
（資料提供：浜方ふれあい館）

宇久島の海士は1187年（文治3年）に平家盛公が島へ流れて来た際、一行を手厚くもてなしており、その恩賞として五島列島一円において永久採鮑権（永遠に鮑を採ってよい権利）と、

漁で冷えた体を温めるために火をおこす原料となる薪の採取権を与えられている。このことから1383年（弘和3年）には福江島まで進出して五島列島一円で漁を行うようになり、海士が採る鮑は俵物として出荷され五島藩の財政を支えた。しかし、1981年からは伝統の「裸もぐり」スタイルをやめてウエットスーツを着用しての鮑漁を行ってきたが、沿岸海域に生息する海藻が死滅する「磯焼け」の進行に伴い鮑が激減し水揚高も低下（グラフ3参照）、その上後継者不足も重なり、近年は鮑漁だけで生計を立てていくことが難しくなってきた結果、真の意味での「海士」はいなくなってしまった。

グラフ3 宇久町の鮑水揚高推移



資料：宇久町郷土誌より当研究所で作成

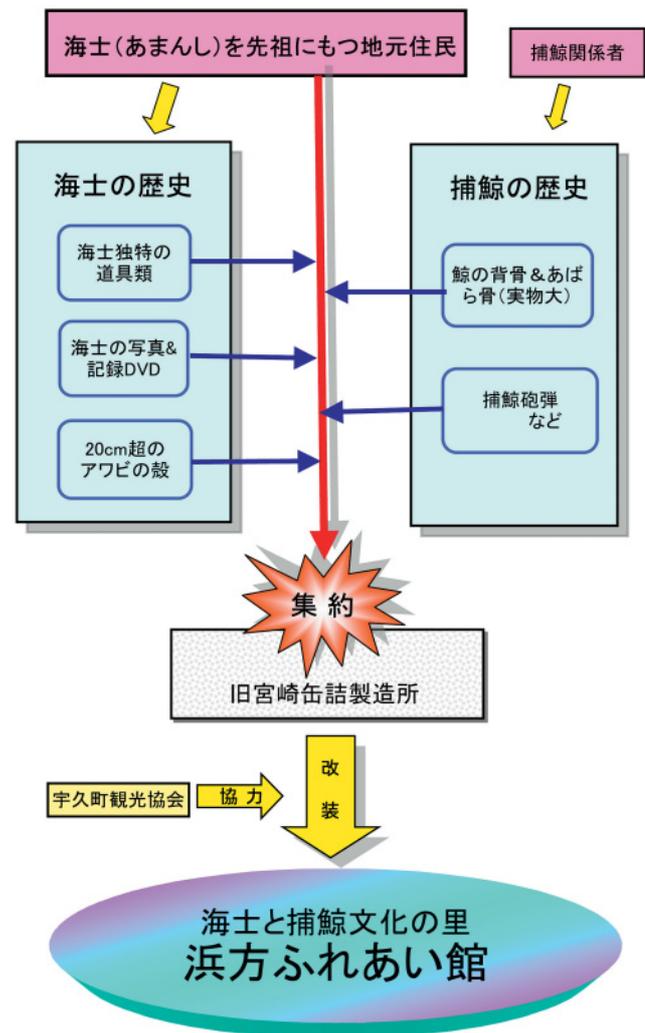
(2) 活動内容

① 浜方ふれあい館

島内における海士の集落は堀川・向江・佐賀里・旦の上という4つに限られている。この4集落（=浜方地区）の住民の間で、このままでは埋もれてしまう宇久島独特の海士の歴史をどうにかして後世に残し、それを島の活性化に役立てることができないだろうかという声上がりはじめたことが発端となり、「海士と捕鯨文化の里 浜方ふれあい館」が2008年4月にオープンした。

この「浜方ふれあい館」は、かつてアメリカや台湾向けに宇久島の海で育った鮑やサザエ、生ウニなどの缶詰を製造していた宇久島の産業遺産ともいえる建物「旧宮崎缶詰製造所」を、島の歴史文化を活かす中心施設として、宇久町観光協会の協力を得ながら地元住民が手造りで改装した施設である。また、その内部の展示内容も全て手

図表2 地元住民の熱意から生まれた「浜方ふれあい館」



資料：当研究所で作成

造りであり、海士を先祖にもつ家の人々が当時の道具や写真などを持ち寄り提供した。それに加え、宇久島がかつて江戸時代に網取り捕鯨で栄え、近代捕鯨になると南氷洋で活動する船団へ砲手や機関士を多く送り出した“捕鯨の島”という特徴も示すべく、捕鯨砲弾や鯨の骨などを捕鯨関係者が提供した。また、鑑賞した地元住民も思わず涙したという在りし日の亡き父や夫が海士として紹介されるDVDも作成した。このように「浜方ふれあい館」は、宇久島初となる地元住民の努力によって誕生した施設である（図表2）。

②関連グッズの販売

また、浜方ふれあい館ではオリジナル海士Tシャツなどに加えて、地元住民が島の美しい砂浜に打ち上げられた貝殻のなかから特に状態のよいものを収集し、それをもとに手作りで加工したキーホルダーや携帯ストラップを宇久島オリジナルグッズとして販売しており、ふれあい館を訪れた人々に大変好評である。



浜方ふれあい館（外観）



浜方ふれあい館（内部）

3. 観光協会の取組み

宇久町観光協会（会長 平山忠一郎氏）では、福井樹夫氏が中心となって活動している。平山会長は地元企業経営者、福井氏は宇久行政センター職員のため島おこしに熱心なことは当然だと思われがちだが、それぞれの立場の前に宇久島民として島の行く末に人一倍危機感を持っており、島の活性化のためには自分の時間と私財をなげうつなど、その活動振りは際立っている。

（1）活動内容

①手造りの厨房施設

自身が先祖代々海士の家系でもある福井氏は、前述した「浜方ふれあい館」の立ち上げにも海士の子孫として携わっている。その際、このふれあい館を単なる資料の展示場とするのではなく体験型施設と捉え、訪れた人に海士と捕鯨の歴史を学んでもらった後、鯨などを利用した郷土料理を提供する場が必要と考えた。そこで、ふれあい館に隣接する自己所有の倉庫を自費で改造し、

手造りで厨房施設を完成させた。この施設ができたことで、浜方ふれあい館を訪れた人々に対して地元住民による手作りの郷土料理を振舞うことが可能となった。

②体験型観光コース「海士の里探訪」

2007年、宇久島の他に同じ佐世保市の黒島や隣の小値賀島などを巡るモニターツアー一行が来島した。その際、福井氏は“宇久島版さるく”ともいえる「宇久平・海士の里探訪」という鮑と捕鯨に縁のあるまちなみを巡るツアーコースを発案、そのルート設定やマップの作成など精力的に活動し、その評判も上々であった。



「浜方ふれあい館」を訪れたモニターツアーの一行

③文化・スポーツ交流「宇久寺子屋塾」

「宇久寺子屋塾」は、小学生を対象とする交流事業である。宇久島では小学生の間で書道が盛んなことから、これを子どもたちの交流に活かせないかと2008年3月に福岡のそろばん教室の子どもたち10名を宇久島へ呼んだことが最初である。つづいて同年5月、県内各地から5団体（70名）のジュニアバレーボールチームが来島し、バレーボール交流を行った。そのなかには宇久島で書道が盛んであることを耳にし、書道教室を受講するチームも現れるなど、交流は大成功のうちに終わった。今後もこのような文化・スポーツを通じた子ども達の心に残る交流事業を継続し、将来のリピーター客の増加につなげていくこととしている。

Ⅲ. 宇久島の活性化に向けて

現在、隣りの離島・小値賀町は「アイランドツーリズム」として民泊の推進やIターン者の受け入れを積極的に展開しており、また同町内の野崎島には世界遺産候補の教会があるなど、最近よくマスコミに採り上げられているが、宇久島の活性化にあたってはこれと似通った政策を推進



宇久宝島メロン

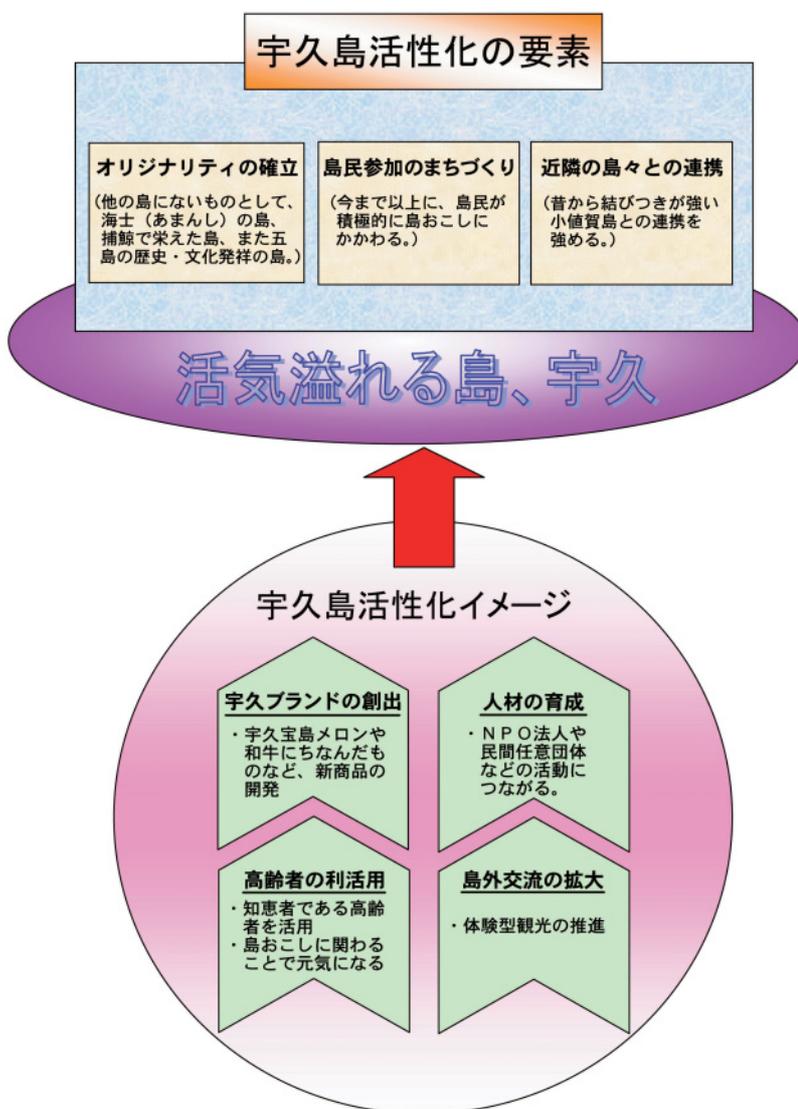


子牛のせり市

していくことは適当ではなく、地域特性を活かした独自の取組みが求められている。

例えば、まず島おこしに携わる多くの人材を育成すること、また今後増えていく高齢者をまちあるきの観光ガイドや郷土料理の創作などに活用すること、加えてまちあるき観光「海士の里探訪」や寺子屋塾に代表される体験型観光を中心とした島外交流の拡大を図ること、さらに近年島内のみで主に贈答物として流通している「宇久宝島メロン」や年間の売上げが平均6～7億円と島の主要産業の1つである肉用牛などを活用した新しい宇久ブランドを創出することなどが考えられる。

そのためには、本稿でも触れてきた海士に代表される島独自のものを前面に出すことや、島民の島おこしへの積極的な参加、また差別化を図りつつモニターツアーにもあった小値賀島など近隣の島々との連携などが有効であると思われる。これらのことは今まさに同じように過疎で悩んでいる島々にも応用可能な要素が含まれている。



資料：当研究所で作成

おわりに

最近の島おこし活動としては、前述の福井氏が中心となり2008年6月、ドラマ「ちゅらさん」の舞台となった沖縄・八重山諸島の小浜島こはまの活性化で有名な平田大一だいいち氏を招き、地元財産を活かした島の活性化についての講演会を開催した。この講演会には同じ佐世保市の離島である黒島や高島からも含めて約400人の参加があり、島おこしについて島民に関心を持ってもらうことに成功したといえよう。さらに同年9月には、初開催となる「第1回 宝島トライアスロン in 宇久」

も予定されており、さらなる交流人口の拡大が期待されている。

島の活性化で隣の小値賀町に後れを取った感のある宇久島だが、こうした目に見える形で着実に活動が広がってきている。一般に地域活性化を図るうえでまず、その地域にしかないOnly Oneを探し出しアピールすることが重要とされるが、宇久島にとって『海士』は格好の素材である。この『海士』の歴史は住民が地元の価値に気が付いていなかった典型的な事例であり、それに地元住民自らが気付き、声をあげたということは、いよいよこの宇久島でも本格的にまちおこしの気運が高まってきたものといえよう。

対馬瀬灯台などに代表される「島の美しい景色」という従来の景勝地観光に加え、他地域にはない地域資源である海士をはじめ、平家伝説に始まる五島列島の歴史・文化発祥の地であることや、捕鯨の歴史を活かした体験型観光は島に人を呼び込むことができる大きな可能性を秘めており、交流人口の増加に十分貢献できるものと思われる。また、佐世保市にとっても魅力的な“市内の島”として関心を持ち、支援することが市の活性化にもつながろう。

(杉本 士郎)



講演会の様子

宝島トライアスロン